

2021年11月発行

CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 62

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

CWSの原点、ララの 記念日を迎えて

11月30日は私たちにとって特別な日です。この日はララ物資第一便が横浜港に到着した日で、北米から日本へ継続的に贈られた救援物資は、1946年から事業終了時の1952年まで、総量1万6700余トン、当時の邦貨で400億円相当であったと言われています。ララ物資は日本が受けた支援の一つですが、実は東海道新幹線も、敗戦からの復興を目指し、世界銀行からの借り入れによって作られました。そしてCWSもララ物資をきっかけに設立されました。（「ララとCWS」ウェブページ）

ララに関しては様々な研究も行われ、最近ではボリビア在住の日系移民の方から▶ご寄稿
◀頂きました。

戦後、ララ物資によって、日本人の8人に1人が支援を享受したと言われています。そのララ物資のオペレーションには5つの精神があったそうです。第一に、援助を必要としているあらゆる人々に「公平」に配分すること。第二に、ララの実施に際し、外国人はできるだけ表に出ないこと。配分計画や実施の具体的な活動は日本側に任せ、外国人は裏方に徹し、外国への物資要請やGHQとの難しい折衝にあたること。第三に、ララ物資を受けることにより日本人が依頼心を起こしたり、自尊心を失うことがないように配慮すること。第四に、官民協働によりこの運動を進めることへの配慮を行うこと。

クラウドファンディング実施中

アフガニスタンの
本格的な冬に向けて、
皆様のご支援が
必要です

▶ 支援する ◀



写真

飢餓と貧困で苦しむ多くの日本人を救った救援物資、ララ物資。

@CWS, Inc.

第五に、いつの日か日本がみごとに復興を成し遂げた時に、今一度「受けるより与える方が幸い」というララの精神を思い出し、今度は日本人が他国の困っている人々に同じような運動を行うようになって欲しい、というものでした。



写真

戦後のララ物資と日本の南米への政策移住の関係性について調査されている
ボリビアの日系移民 佐藤信壽様

この度、私たちはアフガニスタンにおける過去最悪の人道危機に対して、クラウドファンディングを立ち上げました。私たちが貢献できる部分は、膨大な全体のニーズからするとちっぽけなものかもしれませんが、ただ、ララを始めた方々は「たった一人のためにでも」という精神で支援をされていたはずで



私たちも一人でも、一家族でも、命を落とす事がないよう、出来る限りの支援を展開して参ります。ララの精神を今でも体現しています、と先人達に身を持って示せることができればと心より思います。

(文：事務局長 小美野剛)

VECとの出会いと新たな連携の始まり

CWS Japanが事務所を置く新宿区をターゲットにこの1年程取り組んでいる在日外国人支援で新たな連携パートナーを得ました。災害は地域を襲い、そこに居住する住民が被害に遭うことから、平時から地域コミュニティにフォーカスし、多文化共生という視点も取り入れた防災活動を行いたいと考え始めました。そんな時、昨年問い合わせしていた新宿区多文化共生連絡会から連絡を受け、会合に参加することになりました。新型コロナ禍感染症拡大と緊急事態宣言もあって、長い間、中止されていた連絡会がやっと動き出し、会議が再開したという知らせでした。CWS Japanが仮住まいだった御茶ノ水から新宿区西早稲田に戻り、早くも5年が過ぎようとした頃、コロナ禍が始まり、全ての出張を中止したことがきっかけとなって、足元の地域を見つめるようになりました。その初めて参加したオンライン会合でVEC(Villa Education Center)事務局の吉村さんに出会ったのです。



写真

VECの教室の様子

VECは高田馬場（住所は豊島区高田）に拠点を置き、在日ミャンマー人に特化した日本語学習や生活支援を行っている任意団体です。本当に不思議な巡り合わせで、VECに出会った頃、時を同じくして、難民申請中のミャンマー人の方の支援をすることになり、早速、VECが主宰する日本語教室にお世話になることを決めました。

VECの教室は、副代表理事のチョウチョウソウさんが経営するレストランルビーの近所にある一軒家でした。毎週日曜日、午前中は様々なテーマで日本人とミャンマー人が日本語で会話する参加型セッション、そして午後にはミャンマー人のための日本語教室を行っています。いつでも誰でも気軽に参加でき、オープンで大変居心地の良い交流と学び合いの場で、私も二度ほど参加させていただきました。

ミャンマー人も他の在日外国人と同様に、震災を経験したことがなく、避難所生活や日本の災害対応のしくみ等の情報・知識・関心も十分ではないことから、12月に防災セッションを協働企画中です。

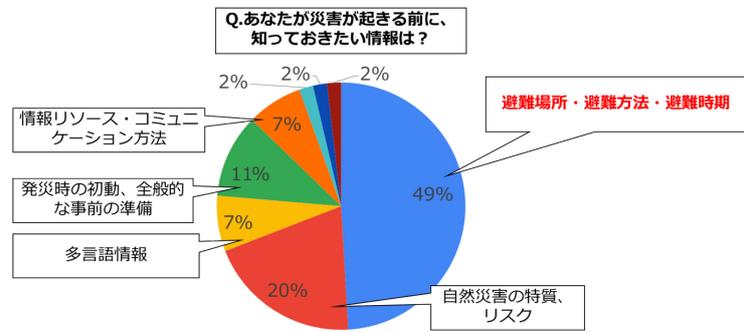
(文：ディレクター 牧 由希子)

中間報告VOL.2：誰一人取り残さないレジリエントな多文化共生コミュニティ新宿区をめざして

CWS Japan は、トヨタ財団より助成を受け、2020年10月から「誰一人取り残さないレジリエントな多文化共生コミュニティ新宿区をめざして」と題した調査事業を開始しています。ニュースレターNo.55の中間報告から7カ月が経過しました。

あれから新型コロナウイルス感染症拡大の勢いが増し、第4波、第5波と続き、長い緊急事態宣言下に置かれました。そのような制限がある環境の中で、オンラインを駆使しながら、また多くの方々の協力を頂きながら調査活動に取り組んでまいりました。

首都圏内を中心とした日本に住む外国人の実態・防災意識・ニーズ調査では、次のような気づきがありました。



滞日外国人の回答者の防災意識及び防災/有事の際のニーズに関しては、災害の経験をされている方が極端に少なく、具体的な災害リスクを想像できている方が限定的でした。また、現在持っている知識や備蓄が十分な備えになっていると思っている人も多いことがわかりました。

例えば、イスラム教徒の方に「避難所での生活で食事を含めて心配なことはありませんか」という質問をすると、「問題ないと思います」と第一声で回答される方もいました。ハラール食がないことや集団生活であることなどを説明すると、食事にどんな材料を使っているのかは最低限知りたい、パートナーのプライバシーが確保できるようにしたいと具体的な要望や心配事が出てくるというケースが多かったです。

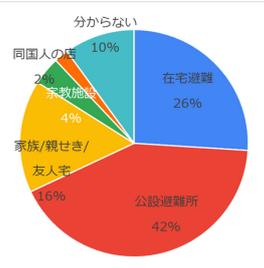
このように、災害時に何に困りうるのかを具体的に想像できていない方が多かったので、まずは災害時にどのようなことに困りうるのかということと一緒に考える機会やきっかけが必要だと感じました。

一方で、彼らのコミュニケーション方法ではオンラインが主流で、普段のコミュニケーションにおいても対面を取ることは少なく、学校とバイトで忙しくそんな時間はないというインタビューでの回答もありました。彼らは30年以内に70%の確立で起こるかもしれない未来の大地震よりも今日明日の暮らしや勉強が最優先で、防災への関心や優先度はあまり高くないことも実感しました。これは国籍に関係なく、日本人にも同様のことが言えると思います。

また、滞日外国人の回答者と宗教施設との関わりですが、アンケート調査の結果、信徒であっても、宗教施設が災害時のセーフティネットになるという認識は極めて低いことが分かりました。

現在、対象地域の住民やそこで働いている方々への調査を進めていますが、外国人・日本人関係なく、宗教施設が果たし得る地域の役割やミッションの理解を深めていく活動も、防災支援の取組とともに実施していく必要があると考えています。

Q.大規模災害発生時にはどこに避難したい？



Q.被災したら、日本国内で誰に助けを求める？



これらのオンラインアンケートやインタビューの結果を、全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）主催の第5回「災害時の連携を考える全国フォーラム（オンライン）」にて報告させて頂きました。その場でも支援分野の共通する団体との質疑応答がなされる等、発表者の私たちにとっても非常に貴重な機会となりました。別の場でも、同分野で活動している支援団体の方々から共感や理解など様々な反応を頂き、現在も意見交換を継続しています。

これからも、引き続き、感染対策を取りながら調査を進め、「災害時に脆弱な外国人を取りこぼさずに支援できるよう、すべての住民がお互いに助け合いの行動がとれるレジリエントな多文化共生コミュニティ」という実現したいコミュニティ像にどう近づくことができるのか、その糸口を模索したいと思えます。

（文：プログラム・オフィサー 西澤紫乃）

厳しい冬を迎える アフガニスタンへ 支援を届けるために

2021年8月にタリバン政権が生まれたことによる、一連の社会経済の混乱に伴い、現在も多くの人が困窮状態に陥っています。CWS Japanは、こうした苦しい状況にあるアフガニスタンの人々の命と生活を守る支援を実施するために、アフガニスタン人道危機に対するクラウドファンディングに挑戦中です。クラウドファンディング期間折り返しの11月26日時点で、60人から92万2千円もの温かいご支援をお寄せいただいております。改めまして感謝申し上げます。

山岳地帯にある内陸国であるアフガニスタンの冬はとても厳しく、現在すでに毎日最低気温は零下となっていており、未だ衣食住が確保できない方々には大変辛い状況です。危機的な食糧危機によって、足を伸ばせない程衰弱し餓死する子ども達が続出しています。数人ではなく、このまま厳しい冬を迎えると100万人の子ども達がこのように命を落としてしまうと危惧されています。食べるもの、暖をとるための燃料など、緊急に必要なとされています。



写真
アフガニスタン山岳地帯の
冬の様子（昨年）

2011年3月11日、東日本大震災が日本を襲った際、CWS Japanの事務局長の小美野は防災関連の仕事でアフガニスタンにいましたが、たくさんの方々がお悔やみの気持ちを伝えてくれました。また、翌日にはカンダハールの市長が義援金の寄付を表明してくれました。自分達も過酷な生活を送っているのに、日本を支援しようとたくさんの方々がアフガニスタン人が寄付をしてくれ、日本と悲しみを共有するといった集会がたくさん開かれました。

「遠い国の事でも大変な時は共感し、何が出来るか模索する。私はそんなアフガンの人々が大好きです。」と小美野は語ります。「私達の限られた命の中で、特には支え、時には支えられ、それを繰り返すのが人生なのだ」と痛感します。アフガニスタンは私にそういう事を教えてくれました。今は過去最悪の人道危機に直面するアフガニスタンの方々を支えたい、私もそう思います。皆様のその想いをしっかりと届けたいと思います。」



写真

基本的な生活インフラがない中で暮らしている避難民女性

クラウドファンディングの挑戦は12月13日午後11時まで実施しています。300万円の目標額を達成できれば、困窮状態にある60世帯の人々に対し、冬を越すために必要な生活費の支援を届けることができます。引き続きのご支援のお願いを申し上げます。また、こうしたアフガニスタンの状況をより多くの人に知っていただくためにも、情報の拡散へのご協力もお願いいたします。

(文：プログラム・マネージャー 五十嵐豪)

クラウドファンディング実施中

アフガニスタンの
本格的な冬に向けて、
皆様のご支援が
必要です

▶ 支援する ◀

STORY WITH OUR PARTNERS -パートナーの声

2011年3月11日に発生した東日本大震災から10年が経ちました。

CWS Japanはそこから10年間、ともに活動する仲間を増やし、多くの方々のご支援とご協力、温かいお言葉に支えられながら、国内外の災害・防災支援に携わることができました。その活動の多くは、わたしたち単独でできるものではありませんでした。

当時から現在に至るまで、わたしたちがこだわっているのは「パートナーシップ」です。

今後も、同じもしくは他のセクターで活躍されているパートナーとの連携やネットワーク構築を通して、災害時に支援の手が届かず取り残される人々のいない社会の実現を目指していきます。

そのために、この10年という節目を迎え、これまでのわたしたちの活動によるインパクトを客観的に振り返るとともに、今後の活動に向けて、改善課題を抽出すべく、何名かのパートナーの皆様へインタビューをさせて頂きました。

CWS JAPANを 内部から支える 人たち VOL.1



インタビュー相手: 小海光様
(公益財団法人ウェスレー財団
代表理事)

ーCWS Japanを知ったきっかけはなんですか？

私は、合同メソジスト教会の牧師で、90年代、2010年代のアメリカで教会の牧師をしていました。その時に、アメリカのCWS (Church World Service) の働きを教会として支援し、また支援活動、例えばCrop Walk (貧困問題撲滅へのアドボカシー)の参加や、2005年のニューオーリンズを襲ったハリケーンカトリーナ緊急支援、2010年のハイチ地震被災救援のために献金を集めたり、ボランティアを募ったりの援助に関わりました。

CWS Japanは実は、2012年に日本に宣教師として派遣されてきてから初めて知りました。特に2016年にCWS Japanが企画した『ララ70周年記念フォーラム』で、北米キリスト教会からの支援によって始められたNGO団体の1つとして、ウェスレー財団も企画に関わり、北米クリスチャンたちの祈りと支援の歴史を振り返ることになったことが、連携の始まりです。この70周年の企画の一環で、ウェスレー財団が支援し、日本でのクリスチャンの支援の歴史を振り返った動画を制作しました。YouTubeにも掲載されていますね。これまでの活動を残していったり、今後メッセージを発信していく方法としては、映像やインターネット上のツールを活用したものが主流になると思うので、そのようなデバイスをどんどん活用していくことはいいことだと思います。

"北米クリスチャンの思いと祈りが、日本の地に根つき、今、日本のNGOとしてこの地で活動していること、さらに、国外にも今度は支援の手を差し伸べるまでに育ったこと、このアイデンティティーを共有し合えることは大きな恵です。"

ーCWS Japanと連携して良かったことはなんですか？

まず、CWS Japanもウェスレー財団も、その元が北米キリスト教会による支援であることから、そのミッションの根底に、キリスト教の信仰に基づく愛による支援と共生の思いを大切にしたい人道支援があり、それを歴史からのレガシーとして引き継いでいると思います。

宣教師たちの働きを支えた、北米クリスチャンの思いと祈りが、日本の地に根づき、今、日本のNGOとしてこの地で活動していること、さらに、国外にも今度は支援の手を差し伸べるまでに育ったこと、このアイデンティティーを共有し合えることは大きな恵です。

CWS Japanもウェスレー財団も世界のミッションパートナーのネットワークを持っているので、その関係を大切にしながら、国際社会の1員として責任を担っていくことの自覚を認識しつつ協力していけることは、お互いにとって良いことだと思います。

ーCWS Japanへのアドバイスや今後に期待することはなんですか？

ウェスレー財団は、直接に人道支援を行うというより、人道支援をしている団体の働きを助成金という形で支援すること、また協働プロジェクトとして共に活動していくことをミッションとしています。CWS Japanは、災害・緊急支援活動への知識と経験が豊富なので、信頼して支援できると感じています。

"CWS Japanにも支援が一方的なもので終わるのではなく、人材を育成する支援にまで発展していくように力を入れてほしいと願います。"

今後への期待としては、ウェスレー財団のミッションであるリーダーシップの育成にも力を入れていってほしいと願っています。

支援活動は、一時的なもので終わらせないためにも、そのコミュニティの人々の自主性、自立性の育成が必須であると思います。たとえ、緊急災害支援であったとしても、防災のために、また、将来の災害の時に備えられるように、そしてその際にどう自主的に活動できるかという点を考えられるように、地域の人々のリーダーシップの育成が大切であると思います。そのために有効な投資をしてほしいです。特に次世代のリーダーを育てていくことは、日本にとっても大切ですし、国際社会の日本の責任でもあります。

ウェスレー財団としても、若い世代の方々には、多様な経験をすることや何事もやってみるという姿勢を大切にしていきたいですし、自分の今までの常識を覆す経験や自分に対する新たな発見と気づきが生まれる機会を提供したいと思っています。そのような経験や発見が、その後の人生のどこかで振り返った時に、そこかしこに散らばった無数の点ではなくて、繋がった線となり自分の可能性を広げてくれる宝物として残ると信じています。

CWS Japanにも支援が一方的なもので終わるのではなく、人材を育成する支援にまで発展していくように力を入れてほしいと願います。そのために、ウェスレー財団と、また他のパートナーと共同して活動していければ良いと思います。



インタビュー相手: 石渡幹夫 様

(東京大学大学院客員教授・
国際協力機構国際協力専門員)

—CWS Japanを知ったきっかけはなんですか？

CWS Japanのことは4,5年程前から事務局長の小美野さんを通して知っていました。私が出席していた防災関連のセミナーや国連主催の国際会議に小美野さんも出席していたことからCWS Japanの活動も紹介いただきました。

東日本大震災被災地の気仙沼から石巻を対象にした復興におけるジェンダーの役割についての現地調査と一緒に実施したこともありました。そのようなきっかけを経て、CWS Japanのアドバイザーとして関わり、2年経ちます。

"従来のアプローチだけでは対応できないような、ギャップを埋めるための取組をCWS Japanがコミュニティとの連携を通して実践していると思っています。"

—CWS Japanと連携して良かったことはなんですか？

私も貢献していますが、CWS Japanは日本での災害対応後、その支援活動を通して見えた災害の教訓をまとめたレポートを出版しています（例えば、2018年 西日本豪雨災害、2019年令和元年東日本台風（台風第19号）、2020年令和2年7月豪雨 等）。しかも、災害後まもなくしてすぐにまとめ、それらの教訓を発信します。これを実施しているアクターはそんなに多くありませんし、そもそも日本の災害の教訓を英語でまとめられたものも、世の中には決して多くありません。また、これらのレポートには、ジェンダーの視点、避難所の環境や運営、貧困層等の弱者への配慮、新型コロナウイルス感染症による影響等、社会的な視点を含めて分析している点は非常に意義があると思っています。

—防災支援・緊急人道支援で大切にしているアプローチや課題を教えてください。

従来の日本の防災は工学的または理学的な分析や援助が多いなか、上述したジェンダーの視点、避難所の環境や運営、貧困層等の弱者への配慮等に支援とニーズのギャップがあると考えています。従来のアプローチだけでは対応できないような、これらのギャップを埋めるための取組をCWS Japanがコミュニティとの連携を通して実践していると思っています。

日本の技術を活かしながら、コミュニティベースで防災活動を行うというアプローチというのは、日本で災害対応を実施しているNGOならではの強みなのではと思います。

ーCWS Japanへのアドバイスや今後に期待することはありますか？

日本の災害経験を通じたノウハウや経験自体を伝え、先進的な技術を活かして、海外での防災事業に、延いてはコミュニティのレジリエンス向上に繋げることは重要だと思います。このようなアプローチは公的援助ではカバーしきれない点であることも踏まえ、今後もCWS Japanが積極的に進めていくことを期待しています。

小海光様、石渡幹夫様、インタビューへのご協力ありがとうございました。

今後、インタビュー記事を定期的に皆様にお届けしたいと思いますので、是非ご高覧ください。



▶ これまでのインタビュー記事は[こちら](#)をクリック

支援募集：12月13日（月）午後11:00まで

アフガニスタンの生活困窮者が生き抜くために命を守っていく

クラウドファンディング実施中

アフガニスタンでは8月政変の影響で、写真の家族のように多くの人々が、着の身着のまま避難し、食料の蓄えのないまま過酷な冬を迎えようとしています。この冬を生き抜くために、皆様からのご支援をお願いいたします。

詳細は ▶ [こちら](#) ◀ または上記QRコードからアクセス

特定非営利活動法人CWSJapan
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

メールアドレス：
public@cwsjapan.jp
電話：
03-6457-6840



[CWSJapan](#)



[@Japan_CWS](#)



[cws_japan](#)